

【読書感想文の部】

※作品内の表現については原文のまま掲載しています。

小学校低学年 最優秀賞

「トットちゃんの15つぶのだいず」

北中小学校 2年 和田 梨央さん

この本は、じっさいにせんそうをたいけんしたトットちゃんのお話です。トットちゃんは、みんなが知っているくろやなぎてつこさんです。

トットちゃんが小学2年生のときに、日本は、せんそうをはじめました。せんそうが始まる前までは、トットちゃんは、お父さん、お母さん、おとうと、犬のロッキーと幸せにいらしていました。まさか、かぞくそろってあんしんで、うれしかったまい日からいろいろなものがなくなっていくなんて、思ってもみませんでした。

ばくだんをつんだB29というひこうきがとんでくるたびに、トットちゃんたちは、にわにつくったぼうくうごうへにげこみます。いつ、ばくだんがおちるかときどきしてねむれませんでした。トットちゃんは、「ねむいし、さむいし、おなかがすいた」が、口ぐせになりました。

トットちゃんのお父さんもへいたいさんになって、いえからいなくなりました。せんそうへ行ったのです。だいじな人がいなくなりました。とうとう、トットちゃんの一日の食べものは、だいずが15つぶだけになりました。お母さんが、まいあさだいずをフライパンでいためてくれて、それをふうとうに入れて、トットちゃんは、学校へ行きます。少しでもおなかをふくらませるために、だいずを食べたあとに、お水をのみます。こんな小さいこがかんがえて、くふうをしているのです。同じ2年生のわたしには、しんじられませんでした。だってわたしは、なにもしんばいすることなく、あさ、ひる、よるとごはんを食べられます。しかも食べたいぶんだけ。わたしのすきなおかしやケーキも食べられています。おふろに入って、あったかいふとんでねむれます。すききらいしていることや、ごはんをのこすことが、はずかしくなりました。あたりまえとおもっていたことが、あたりまえではなかったのです。

どうしてせんそうをするのでしょうか。せんそういがいにほうほうは、ないのでしょくか。こんなことをしてだれがとくをするのでしょうか。みんなのあたりまえのちじょうをうばわないでほしい。だれも幸せになるけんりがあるのだから。せんそうほどおそろしいものはありません。せんそうのないみらいがくることをねがいたいです。

小学校低学年 優秀賞

「へいわってどんなこと？をよんで」

日新小学校 2年 石淵 羅那さん

クリスマスに、おばあちゃんからもらった本が心にのこったので、かんそうを書くことにしました。心にのこったページは、二つあります。

一つめは、一ばんはじめのページで、「せんそうをしない」と書かれています。せんそうは、み

んがなくなったり、かぞくがばらばらになったり、しんでしまったり、こわくてたのしくないイメージがあります。ページにえがかかっている絵も、くらくてこわいし、まん中にかかっている絵がなにか分からなかったのですが、ママに、げんしばくだんなどがつまれているひこうき、と教えてもらい、わたしはしらなかったし、本とうにいやなひこうきだなーと思いました。自分が知っているひこうきは、りょこうに行くときにつかうたのしいものなので、たのしくないひこうきがあるのは、びっくりしたし、いやなきもちでした。わたしは、くにとくにでたたかうってというのは、さいあくなことで、いやだし、もうぜったいにしないでほしいと思いました。

もう一つ心にのこったページは、色んなくの人に人たちが手をつないで、たのしそうにパレードにさんかしている絵がかかっているところです。すきなふくをきて、すきなものをもって、みんながたのしそうにわらっています。絵の色も、色んな色があって、あかるくてきれいでたのしそうで、自分もさんかしたいな、と思いました。

今も、せんそうをしているくにはがあると教えてもらいました。わたしは、やっぱりすぐにせんそうをやめて、なかよくしようって言えるようになってほしいです。

わたしができることは、おともだちとけんかをしたら、ごめんねと言いあって、だれとでもなかよくあることが、だいじだと思いました。

小学校低学年 優秀賞

「よるのあいだに」

日根野小学校 2年 高井 梨穂さん

よるのあいだにしごとをしている人がいると言うことを知り、どんなしごとがあるのかなと思ったのでこの本をえらびました。

よるの町では、せいそうやけいび、ほうどう、けいさつ、きゅうきゅうたい、たくさんやしごとがありました。よるの人の少ない時間でしかできないしごとや、朝、昼はたらく人がはたらきやすいようにしてくれるしごとがあります。

けいさつやきゅうきゅうたいも24時間あんぜんをまもってくれています。もし、夜はたらいてくれる人がいなかったら、けがやびょう気になったときこまることがたくさんあると思いました。夜に生まれてくる赤ちゃんがいることも知りました。

わたしがおどろいたことは、しごといがいにもよなきをする赤ちゃんに、ミルクをあげたり、おむつをかえたり、おせわをするママやパパがいて、よるにおきて大せつなことをしていることです。

わたしは今まで夜にこんなにもたくさんやしごとがあって、朝や昼にはたらく人たちをささえてくれていたり、あんぜんをまもってくれていたりすることをしらなかったです。しごと一つ一つがわたしたちの生かつをささえてくれていて、だれかがだれかのためにはたらいてくれているんだと思いました。

この本を読んで、よの中が、きょうりよくしあってできていることに気づき、はたらいてくれていることにかんしゃの気持ちもちました。

小学校高学年 最優秀賞

「マララ 教育のために立ち上がり、世界を変えた少女」を読んで

日新小学校 6年 山口 凜花さん

この本を読もうと思ったきっかけは、マララさんをテレビで見たことはあったけれど実際にどういう人なのかあまり知らなかったもので、もっとくわしく知りたいと思ったからです。

平和に楽しく学校に通うマララさんの町にタリバンがやってきました。タリバンとは、イスラムの教えを理由に女性の教育を受ける権利や、自立する権利をうばおうと人を殺したり、町を破壊したりする組織のことです。タリバンは全ての人達に対し、音楽をきいたり映画やテレビを見たりすることを禁止しました。また、女性が市場などの公共の場に出ることを禁止し、基本的に女性が外出することは許されませんでした。そして、女性は他人に肌を見せないように、テント状の布で全身をおおい目の部分のみ網状になっている「ブルカ」を着用しなければなりません。タリバンは女性の教育をやめさせるために、次々とたくさんの学校を破壊していきました。マララさんの学校では、毎日、ひとりまたとりとクラスの友達が来なくなり、やめていく先生もいました。

この本を読んで、マララさんのように、学校に行きたいと思っても行けなかったり、テレビや映画を見たくても見られなかったりする人達がたくさんいるということを知りました。だから、自分が今、当たり前のように学校に行って勉強したり、テレビや映画を見たり、音楽をきいたりできることのありがたさがわかりました。そして、タリバンはなぜこのようなことをするのか考えてみました。タリバンが女性の教育に反対する理由は、みんなが勉強していろいろな知識を得てしまうとタリバンはみんなに反対されて、自分達の思い通りにいなくなってしまうからだと思います。

この本を読む前は、学校に行って勉強することが面倒くさいと思ったり、毎日学校にいけることが当たり前だと思っていました。けれど、この本を読んだ後には、自分の暮らしている国や町は戦争がなく平和だということを改めて感じました。また、自分にとっての当たり前が世界には当たり前でない人が約6700万人もいることを知って、自分の今の生活に感謝しなければならなかったと思います。

宗教を理由に人を殺し、町を破壊することは決して許されることではありません。なので、私はもっとみんなにこの本を手にとってもらい、このような状況を知ってもらいたいと思います。

小学校高学年 優秀賞

「さっちゃんのまほうのて」

末広小学校 6年 黒川 羽津稀さん

私がこの本を選んだ理由は、私が二年生の時、学校の図書時間にこの本が気になって読んだことがあり、すごく心に残った本だったので、六年生になった今、もう一度よんでみようと思ったからです。

主人公のさっちゃんは、生まれつき片方の手の指がありません。おままごとが大好きなさっちゃんは、幼稚園でお母さん役がやりたかったのに、いつも、背が低いから赤ちゃん役ばかりでし

た。どうしてもお母さん役がやりたかったさっちゃんはある日、まっ先にエプロンを取り出し、「私が、お母さんやる。」

と言いました。すると、

「さっちゃんは手がないから、お母さんになれないよ。」

と言われてしまいました。腹が立ってにげ出したさっちゃん。家に帰ってお風呂場の鏡で自分の姿を見ている時のことがなんだか心に残りました。

でも、私が二年生の時からずっと心に残っている場面があります。それはお父さんとさっちゃんが手をつないでいる場面です。理由は、お父さんの言葉です。

「こうしてさちこと手をつないでいるととっても不思議な力がさちこの手からやってきて、お父さんの体いっぱいになるんだ。さちこの手はまほうの手だね。」

この言葉です。まわりの人より五本、片方の手の指は少ないけど、みんな同じ「人」っていうのが伝わってきました。

この本を読んでから、世界には生まれつき手や足がない人、事故で手足を失ってしまった人、障がいや病気で苦しんでいる人がいるんだと知りました。でも、みんな同じで困ることはありません。私は出会った人が何かに困っていて、自分が助けられることなら、助けたいと思います。いろんな人がいてこの世界が成り立っているんだと、もう一度この本を読んで思いました。この本のことをたくさんの人に知ってもらって、いじめとか差別がなくなればいいと思います。すべての人が大切だとこの本に出会ってから思いました。この本に出えて、私は本当によかったと思います。

小学校高学年 優秀賞

「命に感しゃ」

北中小学校 4年 滝口 楓和さん

わたしは「いのちをいただく みいちゃんがお肉になる日」という本を読みました。この本を選んだのは、この本のタイトルが気になったからです。

この本は、食肉センターで働く坂本さんが主人公の物語です。坂本さんは、牛をかい体してお肉にする仕事をしています。だけど、この仕事がずっといやでした。牛をとく人がいなければ、牛の肉はだれも食べられません。大切な仕事だということはわかっています。でも、牛と目が合うたびに、仕事がいやになるのです。ある日、食肉センター、あした肉になる予定の牛がトラックの荷台につまわれていました。そのトラックにおじいちゃんと一緒に女の子がいました。女の子は、牛のそばに行き「みいちゃん、ごめんねえ。」とずっとあやまっていました。生まれた時から一緒に育ってきた牛のみいちゃんとの別れを悲しんでいました。それでも、おじいちゃんは家族の生活のために、牛を連れてくるしかなかったのです。みいちゃんの命をとく、そのときがきました。「みいちゃん、じっとしとけよ。うごいたら急所をはずすけん、そしたら、よけい苦しかけん、じっとしとけよ。じっとしとけよ。」と坂本さんは、みいちゃんに言いました。そのとき、みいちゃんの大きな目から、なみだがこぼれおちてきました。坂本さんは、牛が泣くのをはじめて見ました。お肉になったみいちゃんを、女の子は泣いて食べませんでした。おじいちゃんが「みいちゃんのおかげで、みんながくらするとぞ。食べてやれ。みいちゃんに、ありがどういって食べてやらな、みいちゃんがかわいそかる？食べてやんなっせ」と言いました。女の子は泣きながら「みいちゃん、いただきます」と、みいちゃんに感しゃして食べました。坂本さんは、もうすこし、この仕事をつづけようと思いました。

わたしがこの本を読んで、一番心にのこったところは、女の子が泣きながら「みいちゃん、いただ

きます」と言っているところです。生まれた時から一緒に育ってきた牛のみいちゃんが、お肉になってしまって、すごく悲しかったと思います。でも、おじいちゃんの言っている事も理かいて、本当にすごくつらい「いただきます」だと思いました。もしわたしが女の子と同じような立場だったら、悲しすぎて食べられなかったと思います。

わたしはこの本から、わたしたちが食べていくために牛をたいせつに育ててくれている人、牛の命をとく人、牛の命をいただいていることを学びました。これからは、いままでいじょうにすべての食材の「命」に感しゃしていただきたいと思います。

中学校 最優秀賞

「聴覚障がいのある男の子の毎日」

長南中学校 1年 福山 侑希さん

私は、「聴覚障害のあるぼくの毎日」という本を読んで、障がいがあってもみんな一緒だと思いました。

ミネソタ州に住んでいるダントンは、生まれたときから、耳がきこえない。ダントンの両親も妹も耳がきこえない。でもダントンは、毎日が楽しいと言っています。テレビを見るときには、字幕をつけて見たりして工夫して生活しています。

ダントンは、聴覚障害のある子どものための学校に通っていて、その学校では、手話や表情、体の動きがよく見えるように工夫して座れるようになっています。みんなとても親切だけれど、親切ではない人もいます。聴覚障がいではない子どもたちが手話の真似をしてからかうこともありました。でも、その手話は、本当の手話ではありませんでした。そんな子たちをダントンは気にしないようにしていました。

聴覚障がいの子たちの通っている学校は、他の学校と変わらず同じ授業や活動をしています。みんなの前で発表したり、放課後にトランポリンで遊んだり。時間になると、お母さんが手を振って合図をしてから、手話で教えてくれます。玄関のチャイムが鳴ったら、リビングにある電灯が光って、目で見てわかるように工夫がされています。友達とアメリカンフットボールをして遊んでも、応援の声が聞こえない。それでも、みんなの表情や体の動きを見て感じるができる。

この話を読んで、何か一つでも工夫をすると、誰もが過ごしやすく、楽しい生活を送ることができるということがわかりました。中学校の授業で、「障がいは社会や環境がつくりだしている」ことを学びました。障がいのある人が困っているのは、「その人に障害があるから」と思っている人がいると思いますが、障がいのある人たちは困っていることをへらすためにいろいろなくふうをして生活をしています。以前、バリアフルレストランの動画を見たとき、自分たちは当たり前かのように、生活していて車イスを利用している人には不便なところだけれど、その逆でバリアフルレストランは車イスの人には便利で、健常者の人には、天井が低くて中腰にならなくてはならず、不便に感じます。それは、そのレストランの環境が影響していて、環境の少しの工夫でこんなにも過ごしやすさが変化することに驚きました。

さらに学習の中で日本理化学工業のことも知りました。その会社の社長さんは、すべての人が

働きやすい環境づくりをしています。ユニバーサルデザインは、意外と身近なところであって、誰が使っても便利なものがユニバーサルデザインだということも知りませんでした。安心・安全に働けるような場所は、とてもいいなと思います。当たり前に使っているものでも、もしかしたら「使いづらい」と感じている人がいるかもしれません。実際私の周りには、聴覚障がいの人はいません。でも、「みんなが気持ちよく過ごせているかな？」と意識して一人ひとりが行動する、学習をすることで考え方が変わっていくのではないかと思います。

一学期には、陸上の十種目選手の壇野さん、ピーチ・アビエーション株式会社の黒木さんが講演に来ていただきました。「障がいがある、ない」は関係ない、みんな同じだと気づかされました。

「知っている」ことで「みんな一緒だ」と誰もが同じように人に対して接することができます。例えば、野外活動や暗い場所では、手話で会話することが難しいかもしれません。そんな時はどうすればいいのか、相手の立場になって臨機応変に対応する力も必要だと思いました。障がいのある人とない人とは、困ることが少し違うかもしれません。でも同じことの方が多いと私は思います。誰でも得意なことや苦手なことはあります。けれども、どんなことでも学んで、知っておくことで、誰かが困っていることに気付くことができるはずです。困っている人に出会ったら、学んだことを行動できるように、そして、その経験を大切に、これからに生かしていきたいです。

中学校 優秀賞

「私の考え方」

長南中学校 2年 小林 香乃夏さん

私が今回読んだ本『きみの存在を意識する』は、司書の先生におすすめしてもらった本の中の一冊だった。タイトルだけを見て恋愛小説かと思い、普段恋愛系の本はあまり読まないの、これ以外にするつもりでいた。けれども、おすすめされた本のあらすじを教えてもらったことがきっかけで、いろいろな問題を抱えた私と同じ中学二年生の話だということ、タイトルの「きみ」が誰を、何を指しているのだろうかという疑問を抱いたことから、この本に興味をもち、読んでみることにした。

この本には、五つの物語があって、話が変わるごとに語り手が変わる。登場人物である五人は、同じ中学校の二年生である。その物語の中で、私が印象に残った人物が理幹だ。

私は自分の性別ははっきりしていると思っている。でも「男と女」のように性別が二つに分けられていることに対して少し窮屈だと感じることに限っては理幹に共感することができた。その中でも私も実際に言われたことがある言葉が、

「女の子なんだから女の子らしくしたら？」

である。この言葉は本当にもやもやとする。自分自身を不定されているように感じるし、女の子らしいって何だろうと疑問が沸いてくる。これがもし、理幹のように「どちらにもなりたくない」という立場だったら、どんな気持ちになるのだろうか。きっととても嫌だと思う。そんな理幹は、自分の考えをしっかりともち、自信をもっているところが魅力であり、尊敬できる人物でもある。私はすぐに意見が変わり、自信がもてないときもあるので見習いたいなと思っている。

ディスレクシアのグレーゾーンにいるひすいが、この物語の中で「本や文章を読むことに時間がかかる、疲れる」と言っている部分があり、私も同じような経験があると共感することができた。ディスレクシアとは読み書きに限定した困難がある学習障害の一つである。

しかし、日常生活の中で、私自身は少し集中することが苦手で、スラスラ頭に入りづらいのだが、私よりも何十倍も不便な思いをしているひすいに対して、心の中で勝手に「共感」してもいいのだろうかと感じた。何十倍も努力して、それでもなかなか読み進めることが難しいひすいに対して同じだと思ふことは、失礼なのではないか。その人がどれだけ困っているのか、自分はちゃんと考えることができていなかったような気がして、申し訳なくなってしまう。どう思うかは、本人にしかわからないことだが、相手が言われてどんな風に感じるかわからないし、相手のことを考えて、これから軽い気持ちで共感しないように気を付けていきたいと思った。

この本の中には、ひすいや理幹以外にも、書字の違和感から合理的配慮を学校に求める心桜や両親と死別し、養育里親の養子となった拓真、大人の期待に応えたい過食気味の小晴、化学物質過敏症の留美名と、いろいろな悩みや個性をもった人物が出てくる。私が初めて出会う言葉もたくさんあり、まだまだ知らないことがたくさんあるのだと改めて感じた。実際に登場人物と似たような人と関わるのがこれからもあると思っている。障害があるとわかり、相手を理解しようと思っても、なかなか上手くいかず、イライラしてしまうこともあるかもしれない。でも、それに対してダメなことだと私は思っていない。なぜなら、腹が立たない人はいないし、相手も自分もお互いに向き合っているから気持ちがぶつかるのだと私は思うからだ。それを避けることもできるかもしれないし、「自分とは合わない」「苦手だ」というのは簡単だ。それでも、人と向き合うことの大切さに気付くことができた。

中学校でも、人権学習の中でいろいろなことを学ぶ。知識だけではなく、さまざまな人の思いを知り、考え方を知ることで、自分では思いつかなかった考え方や意見に触れることができる。これは誰にとっても大切なことだと思う。この機会がなければ、普段困ったときや誰かとぶつかったとき、相手の思いや気持ちを考えたり、一度冷静になって自分と違う考え方の人はたくさんいるのだ、と考えることは、きっと難しいことだと思うからだ。だから、私は人権学習でさまざまな意見に触れ、それについて考える時間をこれからも大切にしていきたい。

中学校 優秀賞

「戦争がひきさくもの」

長南中学校 1年 藤原 咲羅さん

「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。」を読み、愛する人との別れというのはとても悲しくさみしいことだと心から思いました。

親や学校、全てにイライラとした毎日を送る中二の百合は母親とケンカをして家を飛び出した。近くの防空壕で目を覚ますと、そこは七十年前の戦争中の日本。住んでいたアパートも学校もない野原。夏の陽射しとどのどの湯きに苦しんでいると、佐久間彰という人が助けしてくれた。百合は彰が連れてくれた鶴屋食堂で住み込みで手伝いをするようになる。彰と過ごしていくうちに百合は彰に惹かれていく。でも、彰は特攻隊員で敵の軍艦に向かって突撃しないといけなかった。

私がまず驚いたのは「ぜいたくは敵だ」というスローガンがあったことです。しかし、それ以上に印象に残っているのは、「兵隊さんは戦地で戦い、私たちは銃後を護る」という学徒動員の合言葉です。女・子どもは工場で働き、兵隊さんたちを応援している。全然いやだとは思わず、むしろ誇りだと思っていたということ。私は百合と同じで「戦争はおそろしいもの」「二度と繰り返してはならない過ち」

と教えてもらったから、どうしてそう思うのか不思議でした。ある日、空襲警報が鳴りたくさん爆弾がふってきて、たくさんの人が亡くなりました。その亡くなった人たちを見ても、なぜ兵隊さんたちがしている争いを応援できるのだろうと感じました。でも、特攻隊員の板倉さんの気持ちを知って、当時の人たちの心の中が少し見えた気がしました。板倉さんには故郷に残してきた許婚がいます。「その人は一人で自分の帰りを待っている。だから死にたくない。」と言っていました。それを知って、「愛する人のために、自分のために生きて帰りたいんだ、この人は。」と思いました。大切な人と離れるさみしさ、もう会えないかもしれないという悲しさは現在の私たちと何も変わりません。

出撃命令が出て三日後、板倉さんや彰は出撃することになりました。「もう会えなくなる」と、百合は思い出の場所「百合の花の丘」に彰と一緒に行きました。百合は彰が好きだという気持ちを抱きながら「行かないで。」と必死に言い続けます。でも、彰には大切な家族、そしてもう一人の妹のような存在の百合が幸せな世界で暮らしてほしいという思いがあり、「それはできない。」と言いました。

出撃する日の前夜、特攻隊員たちが最後に鶴屋食堂に来ました。百合は止めたい気持ちをおさえて、「今までありがとう。」と彰たちに言いました。最後まで彰たちに迷惑をかけたくないという思いがあつての「ありがとう」だったんだろうと思いました。私だったら、迷惑をかけてしまうかもしれないけど、「行かないで」とひき止めると思います。

彰は百合に、百合の花を渡して行ってしまいました。きっと彰は、百合の花に愛を込めたのだろうと思いました。百合は力いっぱい「彰」と叫び続けます。

百合が次に目を覚ますと、そこは防空壕。住んでいたアパートも学校もある街です。ここで私が心に残っているシーンがあります。家に帰ると泥だらけのお母さんがいて、一晩中百合を探していたというところです。それまでお母さんに対してイライラしてばかりだった百合は、心配して探してくれたことを知って「今までごめんね」という気持ちとともに涙を流します。そのシーンに親子の愛を感じました。戦争中の日本にいた百合は、何度も帰りたいたっていました。大切な彰との別れから、そばにいる人がずっといてくれるのは当たり前ではなく、かけがえのないものだということ、そして、家族の大切さを百合は改めて知ることができたのだと思います。

そして、学校で特攻資料館に行くことになった百合。そこには、彰たちの写真、家族に向けて書いた手紙がありました。驚いたのは、百合に向けて書いた手紙があつたことです。「もう一人の妹というのはうそだ。君を愛している。」という彰の気持ちが書かれていました。彰のうそは優しすぎたんだ。そう思うと自然と涙があふれてきました。愛する人のために行ってしまった彰。別れるのはいやだけど「ありがとう」と言って別れた百合。互いの愛があつてのお別れがどれだけ悲しいんだろうと思いました。

私は校内の平和集会で、一年生の平和学習のとりくみについて発表しました。命の大切さを学び、二度と戦争を起こしてはいけない全校で同じ気持ちになれたので、「伝える」のは大事だと感じました。さらに、この本を読んで、毎日こうして生きていることに感謝したいと思うようになったし、一人ひとりの命、一度きりの人生を大切に生きていきたいと思っています。二度と戦争を起こさないため、自分が伝えられることをたくさんの人に伝えていきたいです。